

## 「ヨソモノ」目線

柴田 哲史



毎年のことながら、この春もまた新しい仲間が寒地土研に加わってくれました。まったくの新顔もいらっしやいますが、なかには以前に寒地土研にいたものの、更なる飛躍のため、外の空気を経験して来いと云うことで、つくばや現場にしばらく席を置き、春風と共に舞い戻られた方もちらほらと見受けられました。

そういった方々から歓迎会の席で、「わずか2年の事業経験でしたが、2年振りに寒地土研に戻ってみると、研究所もずいぶん変わったなと感じました。」とのコメントを聞いて、隣に座っている方に「どこらへんが変わったのでしょうか」と聞くと、「たかだか2年で変わったところなんて、特に感じないけどなあ」とのお答えでした。なんかどこかで聞いたようなやり取りだなと、ふと自分が大使館勤務のため日本を離れていたときのことを思い出しました。

大使館の仕事のひとつに、海外での日本の評価をリサーチするというのがあったのです。現地語はまったくお手上げなので、現地スタッフに英訳してもらった新聞などのマスコミ情報を、辞書を片手に四苦八苦しながら読んでいたのですが、そんな言葉の苦勞以上に私の記憶に刻まれているのは、海外の人達の目に映っていた祖国、日本でした。私の知っている日本とは完全に別物と言っていいくらい違うので、驚き、戸惑ったのを覚えています。同じモノでも（この場合は寒地土研が）、見方によって（外部での経験の有り無しで）、まったく違うモノに見えてしまうことを、海外のまったく異なる文化環境のお陰で、嫌になるくらい実感したことを思い出しました。

この経験は、魚と水の関係に例えられると思っています。魚は水の中に住んでいますが、普段は自分の周りの水を意識することはありません。しかし別な池に移されれば、流石に水が違うと感じるでしょう。異なる環境に入ることによって始めて、自分の身の回りを客観的に直視できるようになるのです。この身の回りの違い

を感じられるようになったことは、海外でもっとも重要な経験だったと実感しています。

地域づくりでも「ワカモノ、バカモノ、ヨソモノ」がキーパーソンだとよく言われます。「ワカモノ」はまだ経験が浅いから、逆に先入観なく白紙状態で回りを見聞きし、考えられます。「バカモノ」は、ちょっと知恵が回る人なら先を読み、失敗を恐れる余りに手を付けるのをやめてしまうところを、考え無しにやってしまう無鉄砲な、ある意味行動力のある人です。失敗を恐れるだけではなくにも生まれない、と言うことでしょう。そして最後の「ヨソモノ」は、その地域ではない他の地域も知っている、身の回りの違いを感じる能力のある人のことであり、地域の良いところも悪いところも見えるため、ずっとその地域にいた人では感じられないことを感じられる、客観的にその地域を見ることができ、地域作りのキーパーソン、と言うことになると思います。

研究においても、一度研究所を出て戻ってこられた方々にも同じことが言えると思います。どんな研究方法があるか、研究結果はどう役立てられそうか、一度外の水や空気を経験した「ヨソモノ」の目線で見直すと、行き詰まりの突破口が見つかるかも知れません。専門外の方からいただいた意見の方が、全体像をよく見据えた指摘だったりするのと同じだと思います。

研究所に戻ってこられた方々も、わずか1年や2年の外での経験だったかも知れませんが、違いを感じられたと言うことは、「ヨソモノ」目線を身に付けられたのだと思います。ただ同時に、この「ヨソモノ」目線は、環境に慣れてくることで、時間経過とともに徐々に薄まっていってしまうことも多いようです。せっかく身に付けた「ヨソモノ」目線ですから、是非早めに研究分析に使っていただき、心機一転、心新たに研究に取り組み、更なる成果に結び付けていただきたい、と願っています。